

大人が絵本を 第20回 言葉と絵本



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*
小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事フアウンダー

言葉を学習する赤ちゃん

子どもたちは年齢に応じた状況で、いろいろな絵本に触れています。ところで、記念すべき絵本との初めての出会いは、保護者の意思に委ねられているのです。お母さんのお腹の中において、お話をたっぷり聴き、穏やかな心地で生まれ出る準備ができるのは、絵本への興味・関心が高い親御さんである場合が多いと考えられます。絵本に関する情報を持ち合わせていない親御さんには、昨今では乳幼児健康診断におけるブックスタートという素晴らしい制度によって、親子と一緒に絵本と出会う機会を得られているのは昔と大きく違ってしています。

赤ちゃんに絵本を紹介することで最も注目すべきは、親子の間に「言葉」が介在するということです。読み聞かせについて発達心理学的観点から実践研究を積み重ねている田島信元氏らは、「発達初期から始まる親子間の読み聞かせ活動について、『子どもと養育者間の絵本を介したことばのやりとり、ことばを媒介とした社会的相互行為』(ヴィゴツキー、2001)と位置づけ、養育者の子どもへの『語りかけ活動』¹⁾としています。言葉は人間同士の関わりをより深く豊かにし、また、活字を操る力をつける礎ともなり、人間が社会でより幸せに生きることにつながっているのです。

泰羅雅登氏は、読み聞かせや、それに続く音読が、脳の健全な発達に大きく関わり、“心の脳”に働きかけ、子どもたちの情動が豊かになり、心身ともに健全に育っていくことを脳科学的に解明しました²⁾。そして、パトリシア・クル氏の「赤ちゃんは語学の天才」論に見る、「本物の人間が介在」しなければ、赤ちゃんは「言葉を認識し区別する」ことができない

という解析³⁾は、赤ちゃんと言葉の重要な関係を説明する決定的な裏付けとなりました。いわゆる文化度が高いということになります。



ブックスタート赤ちゃん絵本
(NPO ブックスタート)

『あそび』
ヘレン・オクセンバリー 作
(文化出版局)



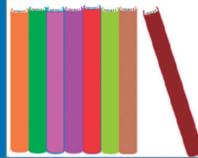
日本では、親子が楽しいひとときを「分かち合う」ことで、親子間のコミュニケーションを促進する目的で導入されたブックスタートですが、世界で最初に始めたイギリスでは、1992年当時、多民族文化に所以する就学前の子どもの読み書き能力低下問題の対応策として、識字率向上のために始められた取り組みです⁴⁾。ここでも文化度を示します。

今も昔も「若者言葉」

イギリスは言葉(母国語)に敏感で、かつ国家をあげての対応も迅速です。それは、メディア教育の「発祥の地」として1930年代頃から教育現場での実践を誇り、理論研究が進んでいる国ということからも明確です。メディア教育の端緒は、英文学者のリーヴィスとその弟子トンプソンによる共著『文化と環境』(1933)にあります。当時のマスメディアの普及に対する危機感に基づき、新聞や大衆文化の影響から子どもを保護するために役立つと説かれたものです⁵⁾。

それから40年経って、新たなメディアが参入した1970年代には、再度、若者の言葉の乱れが指摘されるようになります。アメリカのテレビ番組の影響

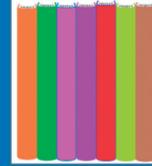
手にするときは！ の関係に迫る



企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

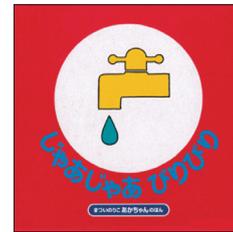
※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



により、若者の間で言葉や文化までもが、アメリカの影響を受けるのです。イギリス英語とアメリカ英語との違いがなくなっていったのです。そこで、リーヴィスらの思想である「大衆新聞・雑誌・広告などを批判的に見る能力をつけることが、子どもを守る予防措置」として見直され、1988年、国語科教育にメディア教育が取り入れられていくのです。イギリスの教育科学省は、メディア・エデュケーションを「言語、解釈、意味に関する根本的な課題をあつかうもの」、「その意味で国語教育と目的を同じくする」、「言語のスキルを伸ばすために寄与しうるもの」とし、国語科カリキュラムに、テレビドラマなどの動画テキストを学習材として積極的に活用する方針を提示したのです⁶⁾。これがメディア・リテラシーの始まりです。

若者の言葉の乱れについては、わが国も同様で、1980年代の高度消費社会に流行した「イタメシ=イタリア料理」などに代表されるような、時代のトレンドとして使われてきました。また、「ら抜きことば」という乱れが指摘されたのも、80年代です。1980年以前でもいつの時代にも、その時の若者のライフスタイルや価値観を表わす「若者言葉」は存在します。ここで問題なのは、昨今の日本では、イギリスと同様にテレビ文化の影響によって日本語の乱れが生じていることにあります。テレビで若い人気タレントが言葉を短縮したり拡張したり、はたまた誤った意味で使用したりすることで、その言葉が一気に巷に広がる傾向にあるのです。本来は否定的な意味を持つ形容詞の「やばい」(不都合である。危険である)⁷⁾が、「すごい」に類似した肯定的な表現として使われていることなど、言葉を取り扱う司書としては気になる語法です。ただし、言葉にも進化があ

ブックスタート赤ちゃん
絵本(NPOブックスタート)
『じゃあじゃあ びりびり』
まついのりこ 作・絵
(偕成社)

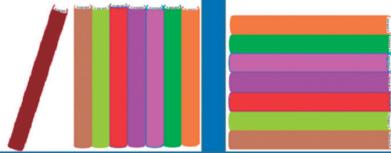


りますので、現代用語を追跡することも、私たち司書の役目なのです。

映像メディアについて、再び、考える

日本では、2000年の教育改革国民会議で「人間性をより豊かにするために、読み、書き、話すなど言葉の教育を大切にする。特に幼児期においては、言葉の教育を重視する」⁸⁾ことが提言されました。文部科学省は、「読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないもの」と読書活動の重要性を掲げていますが、同時に「テレビ、ビデオ、インターネット等の様々な情報メディアの発達・普及や子どもの生活環境の変化、さらには、幼児期からの読書習慣の未形成などにより、子どもの『読書離れ』にある現状を指摘しています⁹⁾。テレビとの接触は、読書離れだけでなく、正しい日本語の習得までも阻害しかねません。

映像メディア社会の現代において、自らの意思が働かないうちに、青少年と同じ環境下にいる乳幼児にも問題の目が向けられています。ほとんどの家庭にはテレビがあり、赤ちゃんが求めていなくても日常生活の中で、テレビから映し出されるチラチラ入れ変わる光を目にし、流れ出る音を耳にしながら暮らしている乳幼児も少なくないでしょう。さらに、



スマホ社会になり、病院の待合室で、またスーパーマーケットで買い物をするお母さんが押しているベビーカーの中などで、指先の発達してきた1歳くらいの乳幼児がスマホで遊ぶ光景をよく目にするようになりました。映像メディアが脳や言葉の発達に及ぼす弊害については本連載第7回で触れましたが、テレビやスマホの与える言葉への影響と、同じメディアとしての絵本が与える影響力は対極上にあることがはっきりと見えてきます。

これらの環境因子から子どもたちを健全に育成するために必要なことは、絵本の読みあいであり、読みかたりなのです。大人の声で、年齢に応じた絵本を、年齢に応じた読みをするということなのです。それは発達初期、つまり乳幼児期からの読みあいが何よりも大切で、その後の発達過程に影響するといえるでしょう。大人と子どもが絵本を読みあうということは、その三者の間に生の声があり、読み手と聴き手の間にコミュニケーションがあります。それは、情緒や想像力、言葉の発達に重要なものなのです。絵本は、考える力、感じる力、想像する力、そして、言葉を獲得していくことに関わり、すべての基盤である「生きる力」を身につけるために必要不可欠なものなのです。



心の内なるものを表現する

中川素子氏は、絵本には「言葉によるコミュニケーション、絵本を読みあう時の身体ふれあいや、同じ時間や空間にいるという意識によるコミュニケーションなど、人と人をつなぐ大きな力がある」と述べ、大人と子ども、親と子ども、子どもと子どもを結び付けるかけ橋としての絵本を「コミュニケーション・メディア」と呼称しています¹⁰⁾。言葉や感情の共有を介するコミュニケーション・メディアとしての絵本は、愛情と言葉の獲得に必要な特性です。赤ちゃんが生まれた瞬間から母と子を結び付けるのは、皮膚と皮膚の触れ合いであり、声で

す。この温もりと言葉は、胎内にいるときから結び付いていて、生まれてからはより強固なコミュニケーションとなるのです。言葉によるコミュニケーションをより豊かに、より幸せにしてくれる道具が絵本なのです。

赤ちゃんは絵本の言葉を届けてもらうことで、耳からの言葉や音、リズムで育っていくのです。そして次第に、耳からの言葉と合わせて、目に映る絵を通してモノと名前がつながっていくようになります。子どもの成長過程に大きく深い意味のあることです。子どもの年齢が低いほど、子ども自身が聴きたい言葉やお話を自ら選ぶことはできません。優れた言葉づかいの絵本、美しい日本語の絵本を、親御さんが愛情を持って選び、愛情たっぷり語りかけてあげることは、そのまま子どもの心と脳と知識の充足につながっていきます。

乳幼児の言葉の数は、2歳から6歳までに日々の体験がもとになって発達します。チェコフスキーは「2歳から5歳までの時期にことばを覚えておくと、驚くべき記憶力を持つ」¹¹⁾と論じています。しかしながら今、「子どもたちの言葉の低下」が問題視されているのです。工藤左千夫氏は言葉の発達について、子どもの五感覚を通して具体的に体験され言語化されたものを「具体的な言語」と呼び、「おいしい」「かなしい」など目に見えない、心で感じた言葉を「抽象的な言語」と区分し、現代の子どもたちが「抽象的な言語」の不足による言語数の低下にあると指摘しています¹²⁾。この「抽象的な言語」は、コミュニケーションに欠かせないものです。自分の心の内を他の人に正しく伝える能力となります。

このような観点から考えると、絵本の目的が教育的であってはならないとは言えるものの、やはり子どもたちが触れる絵本は、美しい言葉、正しい表現の言葉、多様な言い回しの言葉を使ったものを選びたいものです。子どもの目や耳に入るものも、美しいもの、きれいなものを選択し、子どもの感性を磨け

るように支援するのは、保護者の務めだと言えます。そして、そういった親子をサポートする専門家が、絵本に携わる司書であり、親子に携わる医療従事者なのです。

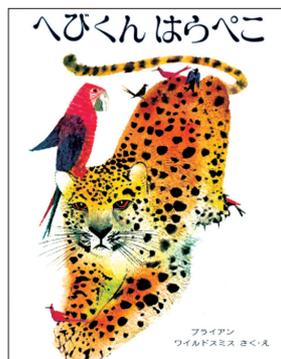
ペンギン イギリスに学ぶ

このようにして見てみると、メディア教育やブックスタートの先進国であるイギリスに学ぶことが多いです。イギリスは母国語（言葉）を大切に、言葉の教育に力を入れ、その教育カリキュラムの研究・開発についても先進国なのです。また、イギリスは世界でもっとも長く、優れた絵本の伝統をもっている国でもあります。現在もなお読み継がれているウォルター・クレインやランドルフ・コルデコットなどの絵本を19世紀末から生み出した国でもあるのです。「子どもをひとりの人間として、独立した人格として認めるといふ考えを持った国ほど、当然すぐれた子どもの本を数多く生み出しています」¹³⁾と松居直氏は解説していますが、まさにイギリスで歴史的に古くから根付いたこの考え方がメディア教育やブックスタートにつながっていると考えられます。

ビブリオキッズ&ベイビーのキャラクターは、ペンギンです。ビブリオでは、ペンギンの世界のように「子どもを中心としたコロニー」をコンセプトとしており、イギリスのような絵本や言葉を大切にするビブリオ独自の文化を構築していきたいと考えま



イギリスの絵本
『へびくん はらぺこ』
ブライアン・ワイルド
スミス 作・絵
すぎやまじゅんこ 訳
(らくだ出版)



す。それは、ビブリオに限らず、私たち「医療法人元気が湧く」における歯科医院でも同様です。法人グループが一丸となって、これからの子どもたち、親子、家族への文化事業を推進し、支援に携わっていきます。



ご拝読、ありがとうございます
ございました



文献

- 1) 田島信元：絵本と子どもの発達－読み聞かせ・読書活動の意義と役割，子どもの文化，45(7)：90-97，2013.
- 2) 泰羅雅登：読み聞かせは心の脳に届く，くもん出版，東京，2009，pp.8-18，pp.75-82
- 3) バトリシア・タール：赤ちゃんは語学の天才，NHK Eテレ スーパープレゼンテーション，日本放送協会，2013.7.29 EテレNHKオンライン <http://www.nhk.or.jp/superpresentation/backnumber/130729.html>
- 4) NPOブックスタート：「ブックスタートがもたらすもの」に関する研究レポート：NPOブックスタート，東京，2014，pp.2-4
- 5) 菅谷明子：メディア・リテラシー（岩波新書），岩波書店，東京，2000，pp.14-17
- 6) 小平さち子：「メディア・リテラシー」教育をめぐるヨーロッパの最新動向，放送と調査 APLIL，p.40-57，2012
- 7) 新村出：広辞苑 第六版，岩波書店，東京，2008，p.2833
- 8) 文部科学省：教育改革国民会議等について，文部科学省，2001.1.1 文部科学省HP http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20010110001/t20010110001.html
- 9) 文部科学省：子どもの読書活動推進ホームページ，文部科学省，文部科学省HP http://www.mext.go.jp/b_menu/sports/dokusyo/suisin/
- 10) 中川素子，他 編集：絵本の事典，朝倉書店，東京，2011，p.18
- 11) コルネイ・チェコフスキー 著，樹下節 訳：チェコ先生のことばと心の育児学－“2歳から5歳まで”より，理論社，東京，1984，pp.349-411
- 12) 工藤左千夫：すてきな絵本にであえたら（絵本児童文学基礎講座Ⅰ），成文社，東京，2004，pp.15-18
- 13) 松居直：わたしの絵本論，国土社，東京，1981，pp.150-154